

トンネル工事を見守る山の神(5)

山の神と化粧木(その4)

東日本高速道路(株)技術部次長 阿部公一

金属鉱山の化粧柱と「坑口七柱神」

森崎和江は、幕府直轄の金属鉱山で山の役人であった武士階級の信仰について紹介している。金属鉱山の坑口に化粧柱が施され、それを「四ツ留」と呼んで神々が祀られた。鉱山によって多少の違いがあるが、4本の化粧柱ごとに、天照皇太神宮、春日大明神、八幡大菩薩、稲荷大明神、そして山神宮が祀られたという。山神宮が祀られたという化粧柱の一つは、やはり山の神の依代なのだろうか。

トンネル工事に従事した作業員の間に、坑口支保工に「坑口七柱神」が祀られると言い伝えられている。化粧木に薬師如来神、坑口左の1基目に不動明王神、坑口左の2基目に出雲大神、坑口左の3基目に天照大神、坑口右の1基目に地元神、坑口右の2基目に水天神、坑口右の3基目に大山神がそれぞれ鎮座するといひ、金属鉱山の坑口に坐る神々とのつながりを感じる。

化粧木の初見

さまざまな来歴が考えられる化粧木であるが、この化粧木は、トンネル掘削現場にいつのころから置かれるようになったのだろうか。置かれた当初から、現在のような形状・大きさだったものかなど、工事記録写真やベテランのトンネル工事従事者の記憶・言い伝えを頼りに辿ってみた。

日本人技術者が独力で掘削し近代トンネル建設の嚆矢となった栗子隧道は明治10(1877)年に工事を開始し明治14(1881)年に供用した。工事にあつ

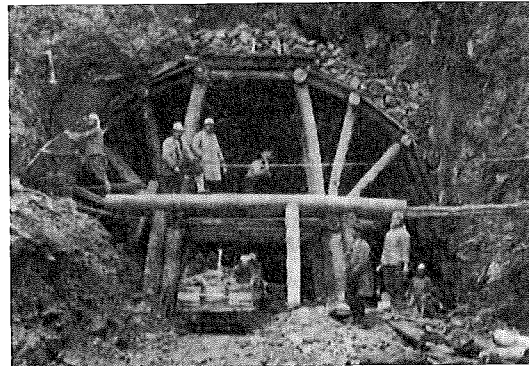
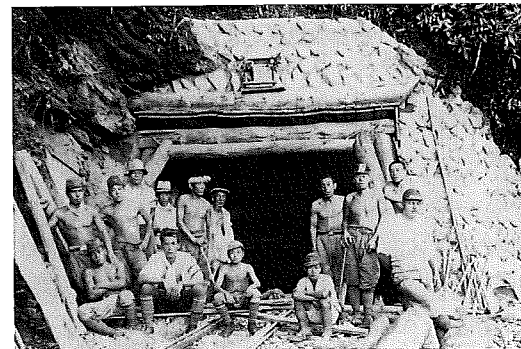
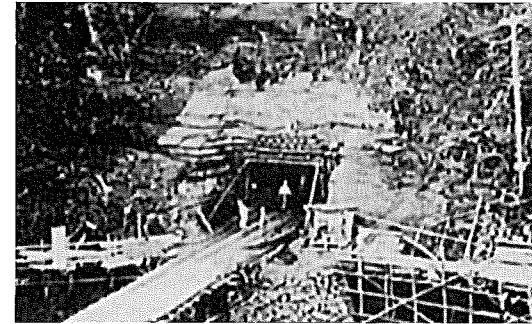
写真-6 栗子隧道拡幅工事(昭和9年工事開始)¹⁾

写真-7 化粧木の原形を思わせる昭和16年当時の坑口(M氏提供)

て、このトンネルの坑口に「山の神」の石碑が置かれ、山の神が祀られたことは連載第1回(2010年7月号)に前述したが、当時、工事の様子を描いた菅原白竜の絵に、化粧木は見当たらない。

さらに、この栗子隧道は、自動車交通に対応できるよう拡幅すべく、昭和9(1934)年より改築工事が本格的に開始された。そのときの坑口の様子を写した写真が残っているが、その坑口にも化粧木は見られない。

写真-8 国道13号栗子ハイウェイ・東栗子トンネル坑口²⁾

戦後の復興から、本格的な高度経済成長の時期を迎えつつあった昭和20年代には、現在の化粧木の原形ともいえる化粧木が現れたとの証言がある。この証言者は、先に紹介した「豊後土工」と呼ばれた大分県出身のトンネル掘削技能集団が、彼らの出身地にある宇佐神宮の鳥居形状を模して化粧木を据えてから、無事故・無災害で工事が進み、そのことが噂として流布し全国に伝播したという。

「豊後土工」の流れをくむトンネル専門工事会社のK建設が提供してくれた写真-7は、昭和16(1941)年に静岡県榛原郡川中根でのトンネル工事の様子であるが、このころもうすでに、鳥居を模した化粧木が定着していたともいわれ、今後さらに多くの記憶をたどる必要がありそうだ。

本格的なモータリゼーション時代を迎え、それまでの栗子隧道(万世大路)に替えて、国道13号栗子ハイウェイが建設され、昭和41(1966)年に開通した。その区間にある東栗子トンネル(延長2,376m)は、昭和38(1963)年10月、福島側坑口において掘削が開始されたが、掘削工事を担当したトンネル工事会社から提供された導坑の写真を見ると、化粧木を確認できる。この化粧木は最近の化粧木よりも一段と長く、先に紹介した昭和20年前後の化粧木と同様な形状をしていて、鳥居の一部材のような振る舞いをしている。

アンケート調査の回答の大部分は、化粧木が置かれ始めた時期は「わからない」というが、四、五十年間トンネル工事に従事した者の一部は、昭和30年代初期や昭和40年代の新幹線工事に、化粧

木があったと具体的に証言しており、このころには各地のトンネル工事に化粧木が定着していたと考えられる。

炭鉱の「芝はぐり」に見られる山の神の依代や、昭和20年代ごろに一部の技能集団が神域を明示する鳥居の形状を模したのが化粧木の原形となり、昭和30年代後半以降、全国で多くのトンネルが建設されるに至り、現在の化粧木の形が定着したと考えたいが、さらに多くの工事関係者の記憶・証言を集めて検証することが必要である。

化粧木の作成・化粧木の形

一般に化粧木は反りのある丸太材を、両端が角のように加工して、できるだけ左右対称に見えるように置かれる。よく見ると左右非対称で、多くは向かって右側が太くさらに左側よりちょっと高めになるように置くことが多いが、中にはその逆の例もあるようだ。

化粧木の大きさは、「基本的には3尺6寸5分≒1.20m」とする意見があるが³⁾、特段の決まりはなさそうだ。

その形に込められた由来や意味は、化粧木の来歴に密接に関係しているが、両端を角のように加工して反増のついた鳥居の笠木と酷似していることは前述したとおりである。

その他、化粧木の由来を山の神が好きな「男根」だとし、太く反りのある形が大事という意見や、「強さ」「天を仰ぐ」様子を表現するという意見もある。

不知火型の土俵入りのように固くて生命力に溢れる反りが理想的ともいい、このような反りのある松丸太は松の木の根元付近から得られるという。

参考文献

- 1) 建設省福島工事事務所：福島県直轄国道改修史 昭和6年～昭和37年、1965.3.
- 2) 吉越治雄編：栗子峠にみる道づくりの歴史、東北建設協会、1999.3.
- 3) 寅次郎の徒然草、<http://blog.livedoor.jp/torajiro0421>